

## 日本山岳会への提言

## 百年の登山文化の継承

松田雄一

日本山岳会の創立100周年を記念して『日本山岳会百年史』が編纂された。「本編」と「続編・資料編」からなる大作である。その編集委員長を務めた松田雄一氏に、日本山岳会にとって伝統と文化の継承がいかに重要かを綴ってもらった。

## 『百年史』の刊行

『百年史』の編集を通じ、強く感じたことを今後の会への提言としてまとめてみた。まず、本会の歴史や登山の記録、会の文化遺産ともいべき絵画、映像記録、写真、地図、登山道具等の資料、重要な行事の記録が必ずしも十分に保存・継承されていないように見受けられた。

『百年史』の編集にあたり、これらの点については、山岳会の縦の歴史と称して、項目別に調査してみた。これは、本会の百年の歴史を客観的に見るためにも必要であり、重要な事項が掲載もれになることを恐れたからでもあった。

会の歴史の基礎調査は、創刊以来連綿として続いている『山岳』および昭和5年に月報として発行

されることになった「会報」(のち「山」に名称を変更)を調査することから進められた。

その結果、関東大震災や、第二次大戦終戦前後の一時期は、休刊せざるを得ない事情があったとしても、時の担当理事の都合によって、やむなく合併号で済まされた経緯もみられた。そのうえ、時の担当理事や編集担当者の都合により、会務報告(理事会の議事録等)に、かなりの温度差も見られた。ある年代は、会報『山』にも掲載がなく、会の記録がまったく見当たらないものもあった。

望月達夫、織内信彦先輩などからは、この点について、問題点の核心にふれ、次のような指摘を受けたことを覚えている。

「本会では、保管を必要とする重

要な会務の記録や文書(アーカイブと称される書簡等の古文書を含む)の保管管理業務が、担当理事の交替する際にも、引継ぎが行なわれておらず、事情が分からぬまま廃棄処分されたり、持ち出されたまま、返却されないものもありうる。そこで、保存を要すると思われる本会の記録は、最低限「会報」には活字にして残しておくように」とのアドバイスを受けていた。

以下に、項目をあげて説明したい。

## 図書・地図等の保存

本会の図書室は、山岳専門図書館として、貴重な資産を受け継いでいる。基本的には、図書を愛していた諸先輩からの、寄贈になる

もので、磯野文庫、望月文庫、神谷文庫、山崎文庫など故人の文庫名を残しているもののほか、榎、松方、藤島、田辺(主計)、成瀬、島田、岩永など多くの先輩の寄贈によるものや、松崎中正会員から百周年を記念して寄贈されたシュラギントワイトのアトラス、外国の山岳会図書室との交換図書によるもの、外国人の篤志家ハリシユ・カパディア名誉会員や、ドイツのウォルフガング・ハイヘル氏などからの寄贈によるもののほか、図書研究出版基金で一括購入したのももあった。

一方、新刊本については、原則として、出版社、大学山岳部、山岳会ならびに会員の著者からの寄贈により、現在は約1万5000冊に達する貴重な蔵書が保管されている。

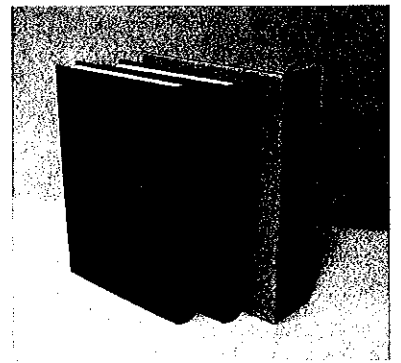
この図書の管理は、図書管理委員会と、専任司書の田村典子氏とで管理していた。ところが最近、田村司書が100周年記念募金事務の応援などに長期間出向していたために、受け入れ業務は行なうものの、図書収納スペースがなくなっても整理が追いつかないという状況である。本業の会員に対す

るサービス業務にも対応できず、地図の整理も滞っていた。

一方、図書委員会も文化活動の一環として「山岳史懇談会」「山岳図書を語る夕べ」など多彩な文化活動を展開している。

地図についても、当該地図を受け入れた時点では分かつていてもその受け入れた担当者が替わってしまうと、分からなくなってしまう場合もありうる。一例をあげると、明治20年代にウォルター・ウエストンが利用していた頃の英文の二十万分の一地形図や地質図が、無造作に新聞紙などに包まれて残っていた。誰が、いつ、寄贈されたかという記録はどこにもなく、よく捨てられずに残っていたものだと思っていた。

幸いこの地図は、地図に詳しい児玉会員が整理して、「日本山岳会所蔵の地図類について」と題して『山』に連続して掲載された。これが地図探検家の三浦裕一氏の目に留まり、財団法人日本地図センターの「地図ニュース」1991年11月号の「ニュース欄」に「登山家は地図メーカー?」のサブ・タイトルをつけて掲載されたので、独立行政法人産業技術総合研究所



山岳会の歴史をまとめた『日本山岳会百年史』

地質調査情報部の目にとまり、本会に対しこの地図についての閲覧の要望が届いた。

その結果、この地図は、同研究所が再編前の地質調査所の前身、農商務省地質調査所の時代(約115年前)に、作成した地図であり、同研究所で国内の所蔵機関などを永年にわたり捜していたこともわかり、この地図の存在が脚光を浴びることになった。その後、しばらくして同研究所から、日本山岳会で所蔵しているものは保存状態がきわめてよいので、ぜひ、借用して、歴史的貴重書として電子ファイル化して保存したい旨の要望があった。本会ではこの地図の作成元からの要望でもあるので、これに応えることにし、本会の理事会にはかり、電子化されたCD、

ROM版のコピーの提供を条件に応諾し感謝されることになった。

### 登山文化継承のための人材養成

本会は登山者による団体であるから、登山を実践することは当然である。しかし一方では、会員の高齢化にともなう登山の文化活動も盛んになりつつある。その活動は単なる仲良しクラブではなく、100年の歴史と伝統を生かしたものであってほしい。日本山岳会の多彩な人材で、ほかの山岳会には見られない、ひと味違う山岳会としての文化活動、それぞれの分野でレベルの高い活動を期待したい。

その意味でも、理事会の前向きな積極性が望まれる。この際、英国山岳会のように、経験のある会員により、若手の会員にこれらの経験や知識を継承していけるような運営はできないものだろうか。ちなみに英国山岳会では、各担当委員会の委員長とは別に、文化遺産管理のための態勢をしいている。その態勢をあげてみよう。

Librarian Emeritus 〓 名誉図書館長。この下にHonorary Librarian がある。



日本山岳会の伝統を育む、第1回有志懇談会

Honorary Archivist＝名誉記録  
公(士) 文書管理者

Honorary Keeper of The Club's  
Pictures＝絵画・写真保管者

Honorary Keeper of The Club's  
Artefacts＝彫刻・彫金記念品保管  
者

Honorary Keeper of The Club's  
Monuments＝記念碑の担当者

英国山岳会では、これらの要職  
には、正・副会長など三役経験者  
や学識経験者として長老を起用し、  
後進の指導に当たっている。

日本山岳会としても、登山の文  
化遺産の管理には、このくらいの  
重点をおいてもよいのではなか  
るか。

### 資料の保存と整理

資料委員会は、将来の山岳博物  
館のための資料収集を目標に発足  
した委員会である。発足当時、寄  
贈された資料に関しては、必ず会  
報に受け入れの経緯などを含めて  
報告し、あわせて台帳に登録して  
いた。よって、保管状況は常に確  
認することができた。ところが、  
最近資料数も増え、本会内での  
保管場所の移動も頻繁に行なわれ  
ていた。そのため、絵画について  
は総会で報告したりリストの在庫管  
理も難しくなっている。フィルム・  
ライブラリーとしてのカラー・ス  
ライドなどの保管や貸し出しにも  
不便をきたしている現状である。

一方、貴重な写真や資料の劣化  
を防ぐためのデジタル化(スペー  
スの節約、未来へ向けてのデータ  
化にもつながる)、膨大な資料関係  
の適切な保存場所の確保など、こ  
れら貴重な文化的資料の保存・継  
承のためには、理事会としても重  
点的に予算の計上を望ましい。

### 編集者に期待すること

『山岳』会報『山』とも、その編  
集は定款に基づき編集長の方針で  
進めることは当然である。したが

って、会員のニーズに応えるため  
の情報の提供、開かれた会として  
会員個人の発言の場の提供ととも  
に、会としての記録を残すことだ  
けは忘れないでほしい。

『山』に掲載されているものを、  
再度『山岳』に載せることは必要  
ないという意見もあるが、重要な  
原稿はあえて『山岳』にも載せる  
べきである。昭和50年の一時期、  
会務報告が省略されたことがあつ  
た。さらに、本会100年の歴史  
の中で、昭和32年だけは、総会報  
告も決算報告もどこにも記録がな  
い。『百年史』編集にあたり、どれ  
だけ苦労したか計りしれない。

### おわりに

『山』5月(744)号に、『百年  
史』を編集する上で、苦労した話  
を書いた。登山界そのものが成熟  
期に入り、従来の取り組みでは将  
来が展望できなくなっていたため  
であった。

そのため、平山善吉前会長は、  
とりわけ苦勞をして会を運営した。  
そして将来を見据えていくつかの  
改革案を掲げ、常に理事会でその  
方針を提示してきた。

本年度の通常総会では、平山前

会長から、「自分の任期中にやり残  
した問題は、次期宮下会長に、引  
継ぎ書でお願いしておいたのでよ  
ろしく」との挨拶があったと記憶  
している。聞くところによれば、  
この引継ぎ書は、前担当理事から  
提出された引継ぎ事項をまとめた  
ものだという。最後の理事会で承  
認を得たうえで発表したようだ。  
総会の直後には、理事会の引継ぎ  
のため、新旧理事出席のもと、公  
式に引継がれているとのことであ  
る。

しかし現実には、理事と委員長  
との関係は、昨年度とまったく変  
わってしまって戸惑っているとい  
う声も聞く。これでは、せっかくな  
進めてきた業務改善計画などは承  
認されていないことになる。今後、  
担当者の引継ぎ事項は、監事立会  
いのもとでも、双方で充分に話  
し合っ、合意の上でなされるべ  
きではなからうか。

日本山岳会100年の歴史は、  
まさに山岳会の文化の伝承にある  
と思う。これでは、会の伝統や文  
化遺産、継承なども途絶えてしま  
うのではないかと危惧する。あえ  
て提言申し上げる次第である。